

釣に興味があるといっても、そんなにのんびりと「日ねもす釣を楽しむ」といった型ではなく、寸暇を見て、ちよつとやってみるといった釣り方なので、勢い小もので数多く、而も釣果も楽しめるということで、こゝ数年手長蝦をやっているのである。

石ころと藻の間をねらって静かに糸を垂れると、スーッと横に静かに引くのである。ウキがボコボコと上下に動いたら必ずと言ってよい程ダボハゼであるから、針を呑み込まないうちに手早く竿を上げなければならず、手長蝦の場合は、ゆっくり静かに上げるのである。この辺がコツで、ピチピチと躍るような感触があつて、小ものなりに結構楽しいものである。釣果に至っては何ら料理の手を要せず、そのまま塩ゆでにするだけでビールのもまなどにはもってこいである。

途中エサをととのえて一行六人（孫三人と倅と娘婿）で湖岸に着いて見て先づ驚いたことには、水位がひどく下っていることである。例年なら波よけの岩場の岩の頭が見えかくれする位の水位なのであるが、岩が全部露出してしまい、どう見ても三、四十センチ位は水位が下がっているのである。

その次は水の色である。この前の「桜川」の記事で「霞ヶ浦の水は緑色である。」という記事を読んでいた

ので、さ程驚きもしなかったが、それでもこれは余りひどいと思つた。

私はこれでは到底釣にならないと思つたので竿を下さずに、小さい方の孫と附近の草むらで虫とりを始めたが他の者は何かを期待して竿をおろしたようである。二、三十分もたつてようやく孫がダボハゼを釣り上げたものである。そして生かして持って帰るといふので、湖の水をビクに入れ、その小魚を放したのであるが、ビクの中の魚の姿が見えない。正に透明度ゼロである。そのあげく家に帰つて水を捨てビクを干しておいたら青ヌルがこびりついてタワシでゴシゴシ洗い落す始末であつた。

× × ×

今は亡くなられたが、鹿島郡の神栖町に私の兵隊当時の先輩で大平洋戦争を共にした戦友がおりました。あの地方の素封家で、以前から村の行政に関係しておられ、鹿島開発についても当時の村長として協力されていたようでした。年に一、二回位、戦友数名でおしかけ、お忙しい処を家族ぐるみの歓待を受けたものでした。

鹿島開発が始まったばかりの頃、鹿島港と常陸川逆水門に案内して貰つたことがあり、展望台に登つて、掘さくの進む入江を前面に後方に広がる松林の中に点々と工場の仮設物らしいものが建ち始めていた頃である。白砂